

## フィクションにおける「核」のノンフィクション

### —『風の谷のナウシカ』と『モスラ』の怪獣表象—

北京外国語大学 北京日本学研究センター 王一飛

怪獣表象『ゴジラ』が公開された1954年、日本は「第五福竜丸事件」に遭遇し、米国の水爆実験は再び「核」の恐怖を日本国民の前に見せた。初代『ゴジラ』は、その「核」に対する恐怖心という大衆の心理を捉えた怪獣映画で、また戦争に対する記憶を喚起する「核」のメタファーと戦争のメタファーという両義性を持っている。例えば、武田泰淳の小説『「ゴジラ」の来る夜』では、「ゴジラ」の表象と戦争を連携し、「ゴジラ」の来る夜という戦争の異常空間を描いていた。

1961年、『ゴジラ』と同じく東宝怪獣映画の系譜に属する『モスラ』が公開され、原作小説『発光妖精とモスラ』は福永武彦・中村真一郎・堀田善衛三人が担当する。今までの「怪獣」表象と違う怪獣を描きながら、「怪獣」を倒さなければいけないものから解放し、新たな可能性を示した。その後、怪獣表象の重心は「核」のメタファーから、キャラクター消費に移し、やがて六〇年代と七〇年代「怪獣ブーム」になった。

1984年公開された『風の谷のナウシカ』は、スタジオジブリの第一歩と言える重要な作品で、戦争による科学文明の崩壊後、異形の生態系に覆われた終末世界を舞台に、人と自然の歩むべき道を求める少女ナウシカの姿を描くという劇場版アニメである。

『ナウシカ』は架空の世界観を踏まえて物語を展開するが、その中における人間文明と自然の構造は既に多くの先行研究によって解明され、作品に隠れる「核」という現実問題への関心も明らかであるが、フィクションの世界に展開された「王蟲」と「巨神兵」は、単なる宮崎駿自身の想像力によるものではなく、戦後日本大衆文化における「怪獣」の表象と強い繋がりがある。内容を考察すると、「王蟲」の原型は怪獣「モスラ」であり、また「巨神兵」は巨大怪獣・巨大ロボット・特撮ヒーローなどの表象に「核」の恐ろしさと「科学万能主義」の傾向を捉えて描かれたフィクションの装置である。

このような「怪獣」の表象は、恐らく現実問題を具現化し、可視化する形で捉えたもので、『モスラ』も『風の谷のナウシカ』も、いずれもそのまま捉えることが困難なノンフィクションの問題を可視化する装置として、「核」の問題、更に科学と戦争の問題を示している。フィクションにノンフィクションの問題を提出し、観客にそれに対する思考を求めているという制作者たちの狙いが読み解くことが可能であると考えられる。